

セクシュアリティをめぐる家族の抑圧と解放
インターセクショナル리티の視点から

元山琴菜（北陸先端科学技術大学院大学）

非異性愛者を抑圧する原因は、異性愛規範とホモフォビア（同性愛嫌悪）とされ、性別違和を抱く人やトランスジェンダー当事者にとっては、性別二元論や性別規範、トランスフォビア（トランスジェンダー嫌悪）が抑圧の原因とされる。暴言や暴力といった嫌悪を丸出しにし、非シスジェンダーと非異性愛者を含む性的マイノリティへのフォビアを表出する「あからさまな差別」は今もまだ根強く残る。しかし、相手に悪意のないフォビアもまた、異性愛規範、性別二元論、性別規範が根を張る学校や職場、家族など、日常生活の中に潜んでいる。

とりわけ、性的マイノリティにとって、カミングアウトが最も難しい相手は家族だとされる（元山 2022）。それは、家族が異性愛規範や性別規範を生産・再生産し、性的マイノリティにとって抑圧的に機能するためである。しかし、日本では性的マイノリティを差別から守る法律やカップルを保障する制度等がないため、性的マイノリティは、家族との良好な関係を維持し、頼らざるをえない脆弱な立場におかれている（三部 2004; 杉浦・釜野・柳原 2008; 杉浦 2013）。

他方で、2010年以降特に、多様性を理解・尊重することへの重要性が社会で唱えられるようになってきたが、このような変化は家族の規範にも影響を及ぼしているのだろうか。そこで本報告では、性別違和と非異性愛を生きる子ども、および、同性に魅力を感じる母親、そしてその家族との関係性を、インターセクショナル리티論を鍵として分析し、子と母が経験した家族の抑圧とその抑圧からの解放にむけてたたかう様相を明らかにすることを通して、現日本社会における家族規範とその影響を考察する。インターセクショナル리티とは、社会的な属性における相互の影響力を理解する枠組みであり、社会的に周縁化される属性を複数もつ者が直面する複雑な問題の原因や抑圧構造を理解する理論的な枠組みである（Crenshaw 1989; Collins & Bilge 2020=2021）。この二人とその家族との経験からは、家族がセクシュアリティを抑圧する機能を今も強くもちつづけていることを浮かび上がらせるとともに、二人が家族規範を書き換えようとたたかう姿も浮かびあがってくる。

本研究は、(公財)村田学術振興財団(M21 助入 025)、および、JSPS 科研費(22K18116)の助成を受けたものである。

【参考文献】

Collins, Patricia Hill and Sirma Bilge, 2020, *Intersectionality, 2nd Edition*, Polity Press. (小原理乃・下地ローレンス吉孝監訳, 2021, 『インターセクショナル리티』人文書院)

Crenshaw, Kimberle 1989, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics" *The University of Chicago Legal Forum*, p. 139-168.

元山琴菜, 2022, 「現代日本社会の『同性愛歓迎ムード』に潜む差別の危険性——マイクロアグレッション概念を鍵として」 牟田和恵 編『フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦』松香堂書店 116-129.

三部倫子, 2014, 『カムアウトする親子: 同性愛と家族の社会学』御茶の水書房.

杉浦郁子, 釜野さおり, 柳原良江, 2008, 「女性カップルの生活実態に関する調査分析: 法的保障ニーズを探るために」『日本=性研究会議会報』20(1): 30-54.

杉浦郁子, 2013, 「『性同一性障害』概念は親子関係にどんな経験をもたらすか——性別違和感をめぐる経験の多様化と概念の変容に着目して」『家族社会学研究』25(2): 148-160.

キーワード: セクシュアリティ、家族の抑圧、インターセクショナル리티